地図絵葉書の時代

宮武外骨コレクション

明治末期から大正にかけて一大ブームがまきおこり、絵葉書は、一つの大きなメディアとしての役割をもった。時事問題から観光地、人物、動物など、あらゆるものが絵葉書に登場。地図も盛んに絵葉書に描かれた。観光地の宣伝だったり、国力を示すものだったり、そこにはまぎれもなく日本の近代化の曙が記されることになる。昭和になりブームは終焉するが、この絵葉書を戦中、コツコツと蒐集編纂していた人がいた。明治のジャーナリスト宮武外骨（みやたけがいこつ）である。日本のある時代を映し出したこの絵葉書コレクションは東大法学部内の明治新聞雑誌文庫に現在も保管されている。

宮武外骨（左上）／「神戸市全図」（左中）／「台湾縦貫鉄道全通記念 明治41年10月24日付」（左下）／「日本海中心時代来る　北日本汽船株式会社」（下）

日本の近代を映し出す絵葉書の地図世界

絵葉書専用のアルバム「地図」の表紙。94枚が収集されている。

紹介する地図は、明治末期から昭和初期にかけて絵葉書として作られ発行されたものである。実はこの絵葉書は東京大学法学部付属明治新聞雑誌文庫内に保管されているアルバムにあるもので、明治のジャーナリスト宮武外骨（一八六七～一九五五）がコレクションしていたものなのだ。「地図」と題のついたアルバムには、九四枚の絵葉書が貼られている。

集められた絵葉書は約三万点

文庫内のアルバムは、「絵葉書類別集大成」と名付けられ、外骨の独自の編纂術によって分類されている。アルバムのタイトルは、「地図」以外にも、「車」「橋」「船つくし」「トンネル」など、二三三項目、絵葉書総数は約三万枚にもなる。これが体系的なおかつ、各項目が明確に分類されているかというと、そうとばかりはいえない。かなりユーモアとエスプリも豊かに、大胆な解釈というか独自の視点で編まれているのである。

例えば、「三重」というのがある。これは同じ絵葉書が三枚ずつ、全部で三〇六枚、ひたすら貼ってあり、最後に〝量の多さを示す〟と記述がある。「一二三」というのは、絵柄の中に舞妓が一人、二人、三人写っているのが、三枚並べてある。次の頁は飛行機が一機、二機、三機という具合で、とにかく一二三の数あわせになっている。

「相対語表」では、東郷元帥と西郷隆盛の絵葉書が二枚並べられ〝東西〟とあり、平家蟹の絵葉書と源氏という酒の宣伝絵葉書が並べられ〝盛衰〟と解説されるといった具合なのだ。

絵葉書は大きく三つに類別される。

「内国為替管理事務合同一周年記念」

「観光の岡山」

「満洲鉄道図　昭和12年3月一日現在」

「東京中央郵便局新築落成記念」

「熱海温泉鳥瞰図　吉田初三郎画伯筆」

「東京湾汽船株式会社航路界図」

「京浜湘南電鉄沿線案内図」

一つ目は、「相対語表」のように独自の解釈によって、本来の絵葉書の意図とは、まったく別の意味をつくり出してしまうもの。二つ目は「田植え」「日本三景」といった観光や風俗をまとめたもの。

三つ目は、「広告絵葉書」「図表」のようにデザイン性を重視したものである。「地図」も、この三つ目に入れられる。

これら約三万枚の膨大な絵葉書は、明治、大正、昭和初期という時代と雰囲気、その当時の空気の流れまでも、まるごと編纂したかのようで、そこからあふれる独特のビジュアルは、個性豊かな光彩を放っている。まさに外骨ならではのもので、普通は使い捨てられる運命の絵葉書が、アートにまで昇華されているといっても過言ではない。ただただ圧巻という代物なのだ。

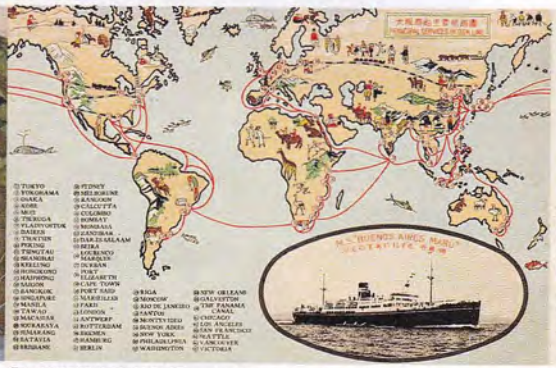
外骨という人は、四国の庄屋の出身で、十八歳で上京し、本作りを始めることになる。本名は亀四郎だが、〝亀は外が骨で中が肉〟だから、との理由で外骨と改名してしまったのである。彼は生涯の間約二〇〇点近い新聞、雑誌、単行本を世に出した。もっとも有名なのが「滑稽新聞」（明治三四年～四一年）で、これには文章や絵柄、写真の組み合わせなどの遊びがあふれていて、人気も高かった。

例えば、当時各新聞・雑誌が新年号に付録を付けて、部数を延ばそうと競っていたとき、外骨は「滑稽新聞」に新年号付録として、なんと古新聞をつけて、それに黒々と「新年付録　紙屑買いの大馬鹿者」と印刷した。そんなことを平気でする人だった。

外骨の気概はそこに留まらない。政府や官憲をもからかってみたりもしたので、発行禁止や罰金を何度も受けている。

外骨が晩年に取り組んだのが、明治時代

「神戸市全景」

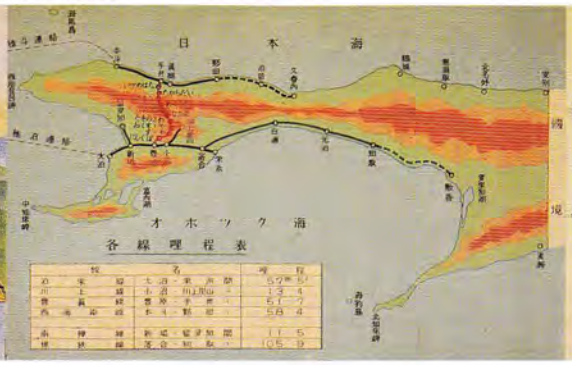


「大阪商船主要航路図　ぷえのすあいれす丸」

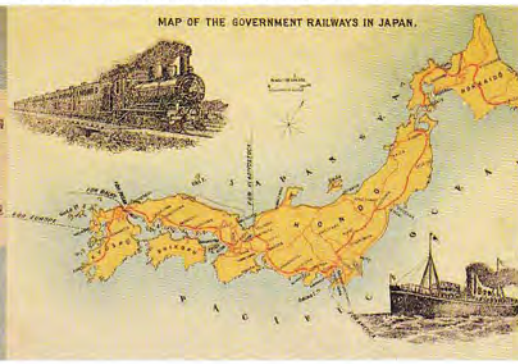
「伊勢参宮の栞　伊勢二見海水浴旅館　二見館」

「別府付近名勝案内図」

「各線哩程表」



「MAP OF THE GOVERNMENT RAILWAYS IN JAPAN」



刻々と動く時代の鼓動が聞こえてくる

の新聞や雑誌の蒐集だった。仲のよかった博報堂の社長瀬木博尚の寄付によって、昭和二年、東大の法学部内に明治新聞雑誌文庫が創設され、外骨はその初代主任として就任したのである。

ここで、新聞・雑誌の蒐集を行ったが、昭和も一五年頃になると集めるものもなくなり、もともと絵葉書が好きだった外骨は「これまで誰も手をつけなかった絵葉書集成に転向せり」と記している。こうして、個人で集めたものや紙屑問屋から持ち込まれたものなど、大量の絵葉書を前に戦時下、絵葉書アルバムが編まれた。これは終戦の昭和二〇年からしばらくの間まで続けられたのである。

メディアの機能をもった絵葉書

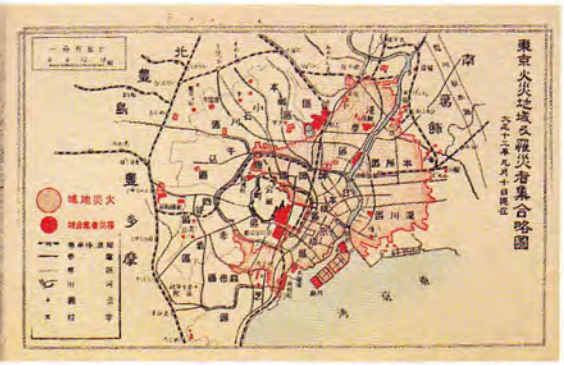
絵葉書は明治末期から大正にかけて、大変な人気を博し、ありとあらゆるものが題材になった。

明治四年に始まった日本の郵便制度は、明治三三年に郵便振替法や郵便船舶法などが制定されるとともに、私製葉書の制式が決められるなどし、現代の郵便制度の根幹が整った。この頃から絵葉書が急速に普及し始める。とくに、日露戦争を題材にした記念絵葉書が明治三七年に発行され人気となってからは、大変なブームとなった。

絵葉書は、宣伝広告はもちろん、おみやげ、ニュース写真、記念、プロパガンダというように、あらゆる要素を供えていたと

約1800点の収録復刻 宮武外骨絵葉書世界

「地図」以外の絵葉書を収録したのが『宮武外骨絵葉書コレクション』(金丸弘美編著　赤瀬川原平・吉野孝雄他解説　無明舎出版☎0188-32-5680)だ。外骨のユーモアあふれる編纂術が生きた絵葉書アルバム16種18冊が収められている。これは本年度第3回ライターズネットワーク大賞を受賞。受賞を記念して絵葉書が作成された。これを1組8枚セットを30名様にプレゼント。希望する方は、住所、氏名、☎を明記の上、葉書にて『ラパン』編集室へ。



「東京火災地域及罹災者集合略図　大正12年9月1日現在」

「佐渡の鳥瞰図　新潟合同自動車株式会社」

「楠公史跡鳥瞰図　新潟合同自動車株式会社」

いえる。まだ当時はカメラも一般的ではなかったし、テレビもなかった。そんな時代のなかで、手軽でビジュアル性のある絵葉書は、大きなメディアとしての機能をもっていたのである。

これらの絵葉書が担っていた役割の一つに観光宣伝がある。ただ景観を写すだけでなく、ここに紹介した絵葉書のように地図を導入したものは、その地形や利便性をより直接的に訴えるものになっている。

一つは記念とおみやげである。安価な絵葉書は旅行のみやげには最適だった。

一つは鉄道や航路などを示すもので、これには会社の宣伝の他に、当時の新しい時代への幕開け、近代化をアピールするものになっている。

一つは郵便や電話、市街地図などを表すもので、当時の政府が進める国家事業の広報的役割である。これには軍国主義下におけるプロパガンダの要素も多分に含まれている。

一つはデザイン性である。明治になって雑誌や新聞が普及し、広告においてデザイン性が重視されるようになる。江戸の浮世絵の技法は宣伝広告の引き札に受け継がれ、それらがチラシや絵葉書へと受け継がれた。絵葉書の世界でも人口や工業生産物などのグラフがさまざまな図版になっており、いずれもデザインが豊かで美しい。

ここに並べられた地図は、たんに場所を示すだけのものではない。日本の近代が歩んだ、その一歩ごとの足跡といえよう。日本が日本という国を少しずつ形にしていった、誇らしげな記録がこの地図にあふれているのである。

「日光自動車定期乗合路線案内図」

「北日本汽船株式会社　樺太北海道定期航路」

「大東京35区」

「横須賀軍港及市街全景」

●文／金丸弘美　●撮影／古文書複製社　幸田彰　●資料提供／東京大学法学部付属明治新聞雑誌文庫　●写真提供／毎日新聞社（宮武外骨）